

『13期 生演奏を楽しむ音楽科』

～心豊かなひととき

日時： 2025年10月24日(金)

場所：池田市・ナムの広場

テーマ：第10回 楽器の魅力 ⑤ピアノ

講師：大阪音楽大学 ピアノ科教授 藤井 快哉(よしき)先生

講義内容：テキストの演題 モーツァルトとベートーヴェンの変奏曲付きソナタ

《ソナタとは》

音楽には絶対音楽と標題音楽がある。

標題音楽：タイトルを聞くと、こういう音楽を表していると想像できる音楽。例えば“美しい夕べ”なら、美しい夕べを想像できる。

絶対音楽：ソナタと聞いても何も想像できない。こういうソナタという形式のことを言っていて、タイトルだけを聞いても曲の内容が、何ぞやよくわからない形式のことをいう。

ではソナタとは何ぞや？

ソナタの由来： イタリア語の動詞『SUONARE：スフォナーレ』（楽器を演奏する）から来ている。

その過去分詞が『SUONATO』でそこから、『SUO』の O が取れて『SO』に、『NATO』の O が A に変化して『SONATA』になった。

題名としてもソナタを始めて用いた人：リュートの曲を書いたジャコモ・ゴルツァニス(1520-1579)。

バロック時代(バッハ、ヘンデルの時代)には**二つのソナタ 教会ソナタと室内ソナタ**があった。

教会ソナタとは

ヨーロッパでは、キリスト教が生活に密着していた。音楽は教会で演奏されていた。

教会の中ではキリスト教の教えが説かれたが、単に言葉だけで説くのと、同時にオルガンの演奏を聴いたり、ミサ曲を聴きながら説くのでは人々の受け止め方が全く違った。毎週のようにミサ曲やカンタータが教会で演奏され、ミサ曲で聖書の言葉が美しい合唱が流れると、人々は“ああ、神様”と神を受け入れた。

ミサ曲は通常複数の楽章(キリエ、グローリア、クレドなど)からなり、厳かな曲だった。

キリエ： 若干悲壮感のあるゆったりとした曲、神に憐れみを乞う。

グローリア、クレド： 神を讃える。キリエよりテンポが速く明るい雰囲気

教会ソナタはこの様式に似せていて教会内で演奏され、厳かな雰囲気のソナタである。

最初の楽章はゆっくりと始まる。次の章はテンポもあがり、メリハリもつく
4楽章の教会ソナタだと、ゆっくり速い、ゆっくり速いが交互になる。
バロック時代になると、ソナタの演奏は教会以外でも演奏されるようになった。

室内ソナタ

秋祭の収穫祭などになると、民衆の間でソナタは誰かの家で演奏されるようになり、そこでは飲めや、歌え、踊りが可能であった。(教会内では飲めや、歌えは御法度！！！)
そのため室内ソナタでは踊りも入ってきて、より世俗的に作曲された。

更にソナタはバロック時代から古典派のモーツァルト、ベートーヴェンに引き継がれる。

当時の鍵盤楽器は三種類使用されていた。

オルガン(パイプオルガンなど)、主に教会に設置
チェンバロ(宮廷で使用、王侯・貴族)、
クラヴィコード(家で使用される)があった。

オルガン、チェンバロ: 指先でタッチしても音が出ない。別に音を出す機構があった。

クラヴィコード: 指先で音が出た。

タッチでビブラート(バイブレーション、振動)が出来たので、演奏時気持ちに乗った。
音楽の重要な役割の一つは出来るだけ多くの人と音を共有すること
しかし音量がとても小さいので、聴衆は満足できなかったため、発展しなかった。

ソナタは**提示部⇒展開部⇒再現部⇒終結**で構成される。

《変奏曲とは》

主題に変奏を加えていく曲。

クラシック音楽家達も競って主題に対してどんな変奏が付けられるかが、腕の見せ所だった。
モーツァルトもベートーヴェンも即興演奏の名手で、当時は聴衆から主題を募ってその場で変奏したりしていた。それが受けた時代。

現在の演奏家は基本的にモーツァルト、ベートーヴェンが書いた楽譜通りに演奏するが、その当時の作曲家たちが、その通りに演奏したとは限らない。ただ、作曲家達は段々とこんなにも一所懸命作曲したので、自分の作曲した楽譜通りに(作曲家の意図通りに)、楽器を弾いてねと主張するようになり、楽譜の重要性が高まってきた

だから、クラシックのミュージシャンは皆、楽譜通りに演奏するようになり、作曲家の意図を必ず忠実に伝えるというのが、演奏家の使命になった。ただ個人の人間なので、演奏者はモーツァルトやベートーヴェンに成り切れない。モーツァルトは現代のピアノとは違うクラヴィコードを使っていたので、現代のピアノを使用して同じように音楽のメッセージを伝えるのは不可能だ。

しかし、モーツァルトやベートーヴェンが作った曲が余りに素晴らしすぎて、その後のどんどん発展していく

楽器を使用している、やっぱりあの曲が弾きたいが、今のクラシックの形。

《モーツァルトについて》

モーツァルト、1756年 ザルツブルグに生まれる

父レオポルドモーツァルトはザルツブルグの宮廷音楽家

モーツァルトの才能を信じ、モーツァルトを連れてヨーロッパ中を旅行し、よりよい就職先を探したが、どこも雇ってくれなかったため、ザルツブルグに帰る。

モーツァルトは時代の寵児であることを自覚し、フリーの音楽家としての道を選ぶ。しかし十分な収入が得られず、道半ばにして、終わる。

《ベートーヴェンについて》

ベートーヴェンもモーツァルトに似ており、父ヨハンも宮廷の歌手であった。ベートーヴェンの才能に気付き、スパルタ教育を行う。ベートーヴェンはピアノの稽古が苦痛で、いわゆるDV被害に会っていた。

更にヨハンはアル中であり、家にお金を入れなかったため、ベートーヴェンはヤングケアラーとして家族を養わなければならなかった。

1787年、ベートーヴェンはウィーンでモーツァルトと出会い、モーツァルトの即興曲を聴く。この出会いのことを、チェルニーはベートーヴェンが、“ムラがあり、ノンレガートだった。でもとても素晴らしかった”と述べたと伝えている。ちなみにベートーヴェンはレガートの名手だった。

《藤井先生の演奏》

W. A. モーツァルト:ピアノ・ソナタ第11番(トルコ行進曲付き) イ長調 K. 331

L. v. ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第23番 ヘ短調 Op. 57 「熱情」

演奏の前に曲の詳しい説明があったが、内容が高度のため割愛。



《モーツアルトのソナタとベートーヴェンのソナタの聴き方》

モーツアルト

サービス精神が旺盛。第一にお客さんありきだった。その当時の演奏会ではソナタを全楽章一気に演奏する習慣は無かった。

モーツアルトは第一楽章弾き、拍手でソデを捌く。今度は女性と一緒に出てきて、自分では弾かず、女性に弾いてもらう。いわゆるジョイントコンサートのようなものがその当時の通例だった。演奏するのは音楽ばかりではなく、退屈すると踊りの曲を弾いて踊り、踊り疲れたら、又音楽を演奏するようなスタイルだった。

ベートーヴェン

超俺様。

俺の音楽を聴け。

どんどんクライマックスに向けて音楽を高揚させて行くのがベートーヴェンのやり口

《アンコールで》

熱情演奏後、先生から優しいベートーヴェンを聴いてもらってからお別れしたい“と暖かいお言葉を頂き、ピアノ・ソナタ悲愴の第二楽章を追加して頂き、皆至福の時を過ごしました。

《感想》

素晴らしい演奏を楽しみました。特に熱情は情熱的で凄い迫力でした。アンコールの悲愴の第二楽章で心のやすらぎをいただきました。解説のなかにあったように、現在の演奏会でも、モーツアルトが開催したような演奏会があったら、どんなに楽しいかと思いました。

《終わりに》

内容が報告者にはレベルが高すぎて、理解できない部分があり、不正確な部分や、読みづらい文章があったと思いますが、ご容赦お願いします。

五班広報担当：國松